

## ヴァレリーのパスカル批判をめぐって

中島 麻子

### 序

ヴァレリーがパスカルについて中心的に論じた作品としては、「『パンセ』の一句を主題とする変奏曲」があげられるが、この作品は、ヴァレリーの、そのあまりに辛辣かつ厳しいパスカル批判によって、かえって注目されているような所がある。

よく知られているように、ヴァレリーの崇拜の対象としていたのは、レオナルド・ダ・ヴィンチ、マラルメ、デカルト、ポー、ドガなどであり、彼らに対するヴァレリーの関心の中心は、彼らの作品における理知の働きの重要性にあるものと考えられる。そもそもヴァレリーは、自己の思想を表明するために、偶像や敵対者を、敢えて設定することがしばしばある。そうすることによって、ヴァレリーは、自らの思想を可能な限り客観化し、そこからこそ自らの思想を見つめなおそうと試みていたように見える。そして、はっきり言えることは、ヴァレリーが取り上げる偶像なり、敵対者なりは、必ず何らかの形でヴァレリーの思想の糧となっていたであろう、ということである。おそらく、ヴァレリーは、特定の人物を崇拜したり偶像化したりすることによってだけでなく、特定の人物を否定し、拒絶することによってもまた、自らの思想を見つめ、鍛え、深めていったのではないだろうか。このような観点から、ヴァレリーのパスカル批判の意味について考えてみたい。

## I 「『バンセ』の一句を主題とする変奏曲」

ヴァレリーは、いわゆる「ジェノヴァの危機」として知られる青年期の精神革命の体験を経て、「あくなき厳密」や「純粹自我」の追求に身を捧げることとなった。この「ジェノヴァの危機」以降は、その数年後に『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』および『テスト氏との一夜』を発表した以外に、ヴァレリーは約二十年間、作品を発表していない。このような意味でも、この兩作品は注目すべきものであるが、ここではヴァレリーの崇拜の対象であるレオナルドを観る『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の中に見てみることにする。「彼（レオナルド）がつねに思いを馳せるのは宇宙であり、また厳密なのだ。存在するものの混乱の中に含まれるいかなるものも、小灌木一本たりと忘れぬような彼である。彼は万人に所属するものの深みへと降りて行き、そこで自己を引き離して自己を眺める。自然の中にひそむ習性と構造とに辿り着き、あらゆる面からこれを鍛え上げる。そして構築し、数え上げ、感動させるただ一人の人ということになる。」<sup>10</sup>

ここで、レオナルドは、あくなき厳密を志しつつ、森羅万象を観察し、それを組み合わせ、結び付けて総合的に理解しようとする人間として描き出されている。すなわち、ヴァレリーは「構成するという意識的な行為によって照らし出される精神の領域の、豊かさや機略縦横ぶり」<sup>11</sup>を示す人物として、レオナルドをとらえて、賛美しているのである。

こういったレオナルド賛美に対して、ヴァレリーは、パスカルについては、極めて厳しい批判を浴びせかけている。ヴァレリーは、パスカルの「この無限の空間の永遠の沈黙はわたしを恐怖させる」という有名なバンセの中の一句を主題として、くだんの作品を書いたのであり、実際この作品でヴァレリーがパスカルに対して批判している主な点は、この語句にまつわる非難を中心として以下の点に集約される。

まずは、パスカルがレトリックを駆使して、自己以外の人間に対して人間の

悲劇的側面を説き付けて、信仰に引き入れようとしている、とする点。

「偉大な能力を備えた精神がつつまなければならぬこと、考えてさえもならないことがあるとすれば、それはまさに他人を説得しようとする意図を持つことであり、そのような目的を達するための手段を用いることである」<sup>19</sup>

「蛇と言えども、これより悪いことができるであろうか？」(Vp 468)

次に、パスカルがレトリックの効果によって、自らもそれに酔いしれてしまい、悲劇の主人公になりきっている、とする点。

「パスカルは、追い詰められた動物のように自分を想像し、わが身をうらみ、嘆く。しかしながら、自分を追いつめているのはパスカル自身である。彼自身のうちにあるすぐれた才能、すなわち強烈な説得力、見事な表現力を駆使して、一切の明白なもの、本来ならいささかも嘆くべきでないものをことさらに汚れたものに立て上げるのは、パスカル自身なのである。」(Vp 461)

そして、パスカルが「知識と救いとの対立をあまりにも極端に強調した」(VP 473) ことについてである。ヴァレリーは「心情とは自分で神を作り出すことによって、自分に答える傾向がある。」(Vp 470) とし、「心情の示す速やかさ、気みじかさ、不安などと批判と希望によって作られるこの(=精神の) 落ち着きは、著しいコントラストを成している」(Vp 471) と続ける。そして、「パスカルは『見いだした』。それは、おそらく、彼がもはや求めることをしなくなったからである。」(Vp 473) と結論づけている。ヴァレリーは、パスカルが「心情(cœur)」に委託したものを、精神の領域に止めながら人間の可能性を信じようとするのである。「無限な忍耐と多くの関心を持ってあらゆる事物の巨大な圧力に対抗しようとする場合、どのような別な種類の思想が人間に生じ得るかを考えてみよう。/ 精神は探求するものである。精神は、宇宙の考察を続けるのに必要なものを、性急に想像したりしない。」(Vp 471)

このように、一見ヴァレリーは、この小論において、ことごとくパスカルをはねつけ、どこかせせら笑っているかのような態度を取っている。

この作品に見られるヴァレリーの短絡的とさえ見えるパスカル批判は、パス

カルの存在が、ヴァレリーにとって何か特殊な意味を持っているかのような印象を抱かせるほどなのだ。

「当時の私に精神の能力と思っていたもの、私はそれを人間と名付け、またレオナルドと呼んだのである。」<sup>(4)</sup>

「私は、当時私に付きまっていた幾多の難題を、あたかも彼がそれらに遭遇し克服したかのように、彼に帰した。彼の能力を想定し、自分の当惑の身代わりにした。私はあえて、彼の名のもとに自分を考察し、私の人間を利用したのだった。」<sup>(5)</sup>

こういった言葉から推して、ヴァレリーが逆に精神の弱さの方を、〈パスカル〉と名付けていたと考えても、あながち見当はずれではないだろう。

## II ヴアレリーの内面的葛藤

確かに、ヴァレリーは、パスカルに対して、執拗に抵抗し続けたかもしれない。しかし、このことによって、ヴァレリーがパスカルに対して無理解であったと安易に結論づけることはできない。実際、ある批評家は、「言葉の最も広い意味において、また非常に象徴的な意味において、ヴァレリーは、自らが考えていたよりも、そして望んでいたよりもはるかにパスカル的な人間であったことは確かである。——そこからこそ非難の必然性は生まれている。」<sup>(6)</sup> というように書いている。

そもそも自らの思想を堅固なものにするために、わざわざ取るに足らない思想を対立させるなどということを誰がするだろうか。おそらくパスカルの思想の在り方は、ヴァレリーにとって抵抗するに足るだけの驚異的存在だったのだ。おそらく、ヴァレリーは、パスカルに対して愛憎半ばした気持ちを抱いていた。

ヴァレリーはパスカルの悲惨がどういったメカニズムをもっているかを、分り過ぎるほど分かっていた。パスカルは、人間存在の不条理をどこまでも絶

望的に追求し、あらゆる人間的現実の根拠に懐疑的な視線を投げかける。そして、パスカルは、そういった人間の不条理を、感じ過ぎるほど感じてしまう感性の持ち主でもあった。そして、この「うめきつつ求める人」(L405)<sup>9</sup> であるパスカルを、感性と分析の見事な結合であるような詩を創造し得たヴァレリーが、理解していなかったはずはない。実際、皮肉交じりにではあるが、ヴァレリーは次のように書いている。

「(.....) 相対的な価値に過ぎないものに人間が絶対的な価値を与えないことは、私も好きである。人間が自分について十分に明確な観念を持ち、自分が所有しうる才能を偶然的なものとみなすことは、わたしの賞賛するところである。もっとも優れた力強い精神の持ち主たちならば、思想というもののもろさ、不安定さ、不十分さに心を動かされるはずであるが、実際は必ずしもそうとは限らない。しかし、いかに偉大であっても自らを偶然的なものと感じないものには、またいかに明確かつ好奇心を持って自己のうちに美点と光明 (ときには非凡な) を認めようとも自分の弱さと平凡さに気づかないあらゆる精神には、何か (ある種の高貴さ) が欠けている。/ これら全てを備えている点で、パスカルはまさにパスカルらしい。」(Vp 466-468)

このように、一方ではパスカルの絶望の内実を決して無理解ではないヴァレリーが確実に存在する。だからこそ、ヴァレリーは、まるで自らに言い聞かせ、鼓舞しようとするかのように、次のように書かねばならなかったのではないか。

「(.....) そもそも感性というものは平衡を知らぬものである。生命体のうちにあって、そのさまざまな能力の平衡を破ることを本来的な使命とするのが感性である、とさえ定義することもできるであろう。それゆえ、われわれの精神は自分自身を刺激して、茫然自失の状態から解放されねばならない。そして、一方では自分がすべてであるという感情と、他方では自分は全くの無であるという動かすことのできない事実との、この二つが引き起こす荘厳で不動な驚きの状態から、立ち直らねばならない。」(Vp 470)

この言葉は、バスカルが苦しんだものの内実と響きあっているように見える。ヴァレリーはこの文章の中で、感性の充溢に対して精神の抑制力、という構図を描き出している。ここには、バスカルにおける幾何学の精神と繊細の精神に通じ合うものが見いだされる。確かに、ヴァレリーは、あくまで精神の力、理性の力によって、人間が茫然自失の状態から立ち上がることを目指している。周知のように、ヴァレリーは、偶然性や習慣性に縛られることのない純粹状態での人間精神の知的営為の可能性を追求し続けたのであるが、しかし、彼の視線はその次元に止まっているわけではない。ヴァレリーはしばしば感受性や感性が人間に及ぼす威力について言及する。例えば、ヴァレリーは以下のように書いている。

「音楽を感じてしまう人間は、単に聴く以上のことをしているのだ。その人は、ほんらい組織可能な感受性である聴覚によって刺激された自らの組織不可能な感受性によって捕らえられているのである。」<sup>9</sup>

こういったヴァレリーの言い方には、バスカルの心情に通じるものがあるように見える。ヴァレリーは、明らかに、感性や感受性が捉える筆舌に尽くしがたいもの、説明不可能なものの存在に圧倒され、またそこに、人間の現実のある種の絶対的真実を見いだしているようでもある。

「唯一の現実は純粹な感覚である。/現実はそれゆえ瞬間的である。/なぜならそれは異論の余地のない、模倣のできぬ、描写できぬものであるから。」<sup>10</sup>

「感覚することは、一切を開始し、それに先行し、同行し、そして完成する。/またそれ故に、一切である。/このことに依り、この語の手前にも彼方にも行くことは不可能である——これは一つの限界点の語であり——或いは一つの全体的反射物、すなわち一切を反射して何物をも吸収しないものである。」<sup>11</sup>

おそらく、ヴァレリーにとって、感性的なものと、知性的なものは、どちらが優勢であるかというような問題ではなく、相互補完的に、現実を支えてくれるものであった。だからこそ、ヴァレリーは、現実の領域を無限に超越して行き、心情の欲求によって、神を生み出すことで解決しようとしたバスカルを、

非難せずにはいられなかったのだろう。それは、以下の言葉の中に表現されている。

「心情は、世界という恐ろしい姿とたたかうにあたって、欲求の力におされ、ほとんどと言っていいくらいつねに、何らかの存在(者)を生み出すものである。」(Vp 470)

「心情ほど愚かしいものはない——パスカルは心情を信すべきだと考えているが<sup>9</sup>。」<sup>(11)</sup>

このように、心情に対してあくまで抵抗しながらも、ヴァレリーは亡くなる二カ月ほど前、カイエの中で以下のように書いている。

「(.....) 心情は勝ち誇る。精神より、身体組織より、あらゆるものより強いのである。——それが事実だ..... もろもろの事実のうちでも最も理解しがたい暗い事実なのだ。生きんとする意志よりも物事を理解する力よりも、だからこのいまましい——C [心情] の方が強いのである (.....) 人間存在のうちには、諸々の価値の創造者たる何かが棲んでいる——そしてそれは全能で——非合理的で——説明できず、自分を説明することもない。」<sup>(12)</sup>

ヴァレリーはカイエの中で何度か、パスカルの「心情は、理性の知らない、それ自身の行動理由を持っている (L. 277)」という言葉に言及し、心情には「無言の圧力と決定があるのである」<sup>(13)</sup> としている。そして、以下のように書く。

「(.....) 精神は納得していても心情のほうは納得しないとき、あるいはまた、精神にとってはなんら問題がないのに心情の方が要求し、また疑いをさしはさむとき、そこに何もないのは明らかでありながら、割り切れない何かが説明されないまま残るということになる。/ ——何も恐れることはない、しかし恐ろしい。/ 何も答えることはない、しかし私は譲らない、私は叫びをあげる。/ 何も希望の材料はない、しかしなお私は希望する。/ 私はこれが好きだ、しかしそれに理由はない。これでなくあれではなぜいけないか? / なぜ? ——私は橋ががんじょうなのを知っている、それでいて私は既に橋が決壊するのを感じて

いる。視覚や定義や推論が、橋が決壊することになる何らかの要因を等閑視しているという気が私にはするのだ。」<sup>(14)</sup>

これらの文章から、ヴァレリーにとってバスカルの言う心情の観念が、非常な脅威であったことが見いだせるように思われる。そして、このような感覚に悩まされていたからこそ、ヴァレリーは、あれほどバスカルにこだわらずにはいらなかったのだ。おそらく、ヴァレリーにとって、「不条理こそわれわれを支配する法則そのものだ。」<sup>(15)</sup> という認識と、バスカルのな心情の原理とは、等価のものとなっていた。

### III 再起するヴァレリー

ヴァレリーは「われわれにとってここ（普通の言語）から、(.....)『自己』よりも奇しくもすぐれた或る自己の観念を伝達することのできるような、一つの純粋な、理想的な『声』を取り出すことが、問題なのであります。」<sup>(16)</sup> というように書いている。ここで、ヴァレリーは詩作によって、自己を越えたものが生まれ出ることを期待しているように見える。そして、「『自己』よりも奇しくもすぐれた或る自己の観念」および、「理想的な『声』」といった言葉は、ヴァレリーの美に対する観念とも無関係のものではないだろう。

「美——とは名状し難さ *inexprimabilité* を意味する——(.....) / 名状し難さとは、あれこれの表現があり得ないということではなく——いかなる表現もそれを刺激し惹き起こした当のものを復元することができず——またわれわれがこの不可能性ないし非合理性を、原因としてのものの真の特性として感じていることを意味している。(.....)」<sup>(17)</sup>

このように書くヴァレリーの言葉の中には、それが決して直接、信仰と結び付いたものではないにせよ、バスカルの「神を感じるのは、心であって、理性ではない。(L. 424)」という言葉と通じ合っているように見える。

しかしさらに、ヴァレリーは名状し難い美や、自己を越えたものを、創造行



為を通して、「取り出し」、「伝達する」ことを目指している。このことは、ヴァレリーにおいて創造行為が人間の自由を保証し、人間の可能性を表現する最も有効な手段となっていたことを物語っているようでもある。そうであるからこそ、ヴァレリーの純粹自我の追求は、人間の可能領域である創造への意欲となって、最も美しく開花することとなったのではないだろうか。一方、「芸術にまったく無感覚な男」<sup>(18)</sup>とヴァレリーに言わしめたパスカルは、確かに人間の営みの全てを虚しいもの、気晴らしでしかないもの、と考えた。そして、実際、創造行為を通してこそ、ヴァレリーと、パスカルの異質性は確認できるように思われる。

パスカルにおける心情が、ヴァレリーが創造行為を通して獲得するであろう美への認識と、ある意味で、同質のものであるならば、パスカルはいわゆる三つの秩序の最も高い所に、この心情の秩序(=愛の秩序)をおき、それらの秩序の間に無限の距離を見いだしている点で、ヴァレリーと決裂することになるだろう。すなわち、パスカルの三つの秩序は、秩序間の断絶を確認するものでもあるのだ。それは、有名な次の言葉の中に表現されている。「からだから精神への無限の距離は、精神から愛への限りもなく、さらに無限な距離を象徴する。なぜなら、愛は超自然的なものだからである。(L 432)」

それに対して、ヴァレリーは秩序間に断絶を設定することはない。それどころか、ヴァレリーは、詩の創作という知的な作業を通して詩的感動(これは、パスカルにおける心情の秩序と同質のものと言えよう)を生み出すことによって、秩序間に連続性を見いだしている。「『詩』は『言語』の一芸術である。言葉のある種の結合は、ほかの結合が生じることのない一感動、われわれが詩的と呼ぶような一感動を生じ得る。(.....)」<sup>(19)</sup>

このように、おそらくヴァレリーは、絶えず自らを脅かし続けるパスカルの動揺を、日々の思索や、創造行為へと還元しながら、「生きようと努めなければならぬ」<sup>(20)</sup>人間としての尊厳を守り続けようとしたのである。<sup>(21)</sup>

確かに、パスカルも幾何学精神をおろそかにしたということでは決してな

い。人間の現実の不条理や定めなさをあれほど鋭く見据えたパスカルの視線は、あくまで理知の働きに支えられていたはずである。パンセの中に現れる、徹底的な懷疑精神の行使は、決してヴァレリーのそれと無関係ではないだろう。しかし、パスカルにおいて、幾何学精神や懷疑精神の行使は、繊細の精神と絡みあいながら、最終的には心情で感じ取る神の愛というものへと収斂されてゆくことになる。

こういったパスカルの志向に対してヴァレリーは、「この絶望した人物は、月の理論を考案することさえできるのに、自分の科学理論に対してさえ不快と反感の叫び声を投げ付けようとする。」(Vp 463) と書いている。そして、パスカルに比して、レオナルド・ダ・ヴィンチの在り方を称賛するのである。

「レオナルドには、啓示などはない。右脇に口をあいている深淵奈落などはないのである。深淵でもあれば、この人は橋梁のことでも考えるだろう。」<sup>22)</sup>

そして、ヴァレリー自身、レオナルドと同様に、深淵があれば橋をかけようとする人間であった。

ヴァレリーという人は、たとえ現実がいかに不条理であっても、なお現実を引き受けることから始めるのだ。それは決して単純な諦めによるものでも、また単純な希望によるものでもないはずである。ヴァレリーは、生を引き受けるため、さらには生を可能な限り豊饒なものへと変えて行くためにこそ、パスカルに抵抗しようとしたのではないだろうか。

そして、こういった点にこそ、ヴァレリーの本質がある。ヴァレリーは、決して絶望の内部で立ち止まらない。ただし、それは彼が絶望に対して無関心であるということでも、無感覚であるということでも決してない。ヴァレリーの研ぎ澄まされた知性と感性は、パスカルが陥らざるを得なかった悲惨の正体を、はっきりと認識し、感じ取っていた。ただ、ヴァレリーにとって、それは人間の領域で、人間に許された能力を行使することによって解決されなければならないものであった。なぜなら、あの「ジェノヴァの夜」以降のヴァレリーは、たゆまぬ精神的営為によって知性という人間的能力をひたすら誠実に培っ

て来たからである。もしかしたら知性の営為そのものさえ幻想であるかもしれない。しかし、ヴァレリーはそれでもよかったのではないか。ヴァレリーは、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」という言葉は、結局のところ軍隊の起床ラッパのようなものなのだ、と言っている。<sup>(4)</sup> 我はあってもなくてもよい。少なくとも、その言葉が、デカルトの意識を鼓舞し、それによって、意識が目覚め、立ち上がろうとするならば、それで Cogito は十分価値を持つのである。おそらくヴァレリーもまた、そういう機能を知性に付与していたのだ。早朝の絶えることない思索を通して精神の営為を言語化することによって、ヴァレリーは、彼の五感が捉えたあらゆる現実の諸相と向き合い、それに疑念を投げかけたり、それを確認したりする時間を、自らに課していた。

感性の充溢があり、理性を越えて行くものが偏在していることを直感するとき、それにけりをつけてくれるのは、きっと朝の数時間の思索の時間だったのではないか。ヴァレリーにおける知性は、自らを含めた人間存在や、世界の現実を、絶えず新たな懷疑の対象としようとする働きを担っていた。

人間を肯定し、人間に敬意を払おうとするヴァレリーが信じようとしたものは、知性であった。それは決して不条理な現実を変えるものではない。しかし、生きて行こうと意志する人間であるヴァレリーは、それでもなお知性を信じ続けるために、パスカル的な弱さ（とヴァレリーには感じられただろう）を、何としても克服しなければならなかったのだろう。ヴァレリーは、理知の綱目を擦り抜けて行く不条理への直観から絶えず立ち上がろうとする人間だった。

以上のように、ヴァレリーは、人間に許された知性という能力を行使すること、そしてさらにはそれを創造行為へと深めて行くことによって、人間の現実をあくまで肯定しようとしていたのだということが分かる。

#### IV 結語

このように、ヴァレリーのパスカル批判の不当なまでの激しさや厳しさは、

必ずしも一面的に捉えられるべきものではないことが見いだせた。

実際、幾何学の精神と繊細の精神に支えられたパスカルの思想の在り方は、感性と知性との見事な融合であるような詩を創作し得た人ヴァレリーにおいても、決して無縁のものではなかったのである。

確かに、芸術や学問を含めた人間の営み全てが気晴らしでしかないのだと言いながら、しかもそういった考えを極めて詩的な言葉で表現するパスカルという天才の無秩序なやり方に、ヴァレリーは我慢がならなかった。詩と同じくらいに豊饒なイメージをたたえた言語表現を、人間的秩序の中で規制するよりは、神の次元と結び付けてしまったパスカルの到達点は、ヴァレリーの目指すところと全く異質であった。

「理性の最後の一步は、自分をこえるものが無限にあることを認めることである。理性はこの点を知るところまでたどりつけなければ、しょせん、弱いものにすぎない。(L. 188)」

このように書くパスカルに対して、ヴァレリーは、その最後の一步のところにとどまりつづけた。しかし、このことはヴァレリーが、自分を越える事物が無限にあるということを認めていなかったということでは決してなかった。ただ、ヴァレリーは、「たくさんの偶像の中で、少なくとも一つは崇拜しなければならない」<sup>(4)</sup> のであればこそ、この世の次元において最も人間的な能力として、知性を選び取ったのである。

あの比類ない天才であるパスカルに対するヴァレリーの言葉が、限度を超えた厳しさや、短絡的と見えるような非難に満ちているとしても、それはヴァレリー個人の内面にのみ限って言えば、決して軽率なものでも、短絡的なものでもなかった。なぜなら、ヴァレリーはそうすることによってこそ、自らの足場を堅固なものにしていったからである。ヴァレリーはパスカルという名を借りた自らの内面の敵を、告発し、糾弾していたのだ。おそらく、ヴァレリーの精神の奥深い所で、絶えず影響し続けていたパスカルの存在は、非難の対象という形をとってはいるものの、ヴァレリーにとって不可欠な存在だったに違いない。

い。

ヴァレリーが、むしろ意識的にパスカル的な思考の在り方への敵意を養い育てていったとすれば、それは、以上のような意味で捉えられるべきではないだろうか。

#### 使用テキスト及び略記

Paul Valéry, *Œuvres* Tome I et Tome II, Bibliothèque de la Pléiade, 1957, 1960 (Œ. I, Œ. II と略記)

Paul Valéry, *Cahiers* Tome I et Tome II, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, 1974 (C.I, C.II と略記)

なお、引用に際しては、筑摩書房版全集を参照した。

#### 注

(1) Valéry, *Introduction à la méthode de Léonard de vinci*, Œ. I, p.1155.

(2) *ibid.*, p.1182.

(3) Valéry, *Variation sur une pensée*, Œ. I, p.468.

以下、「『パンセ』の一句を主題とする変奏曲」のプレイアド版からの引用については、引用文の後にVpと略記すると共にそのページ数を記す。

(4) Valéry, *Introduction à la méthode de Léonard de vinci*, Œ. I, p.1155.

(5) Valéry, *Note et digression*, Œ.I, p.1232.

(6) Judith Robinson, «Valéry, Pascal et la censure de la métaphysique» in *Colloque Paul Valéry* (Paris : Nizet, 1978), p.206.

(7) Pascal, *Œuvres complètes*, éd. L. Lafuma, Seuil, «L'intégrale», 1963. 以下『パンセ』からの引用文は引用文は同書による。また本文の『パンセ』からの引用文は引用文の後に断章番号を記す。

(8) Valéry, C. II, P.381.

(9) Valéry, C. I, p.1200.

(10) Valéry, C. , p.1206.

(11) Valéry, C. II, p.374.

(12) Valéry, C. II, p.388.

(13)(14)(15) Valéry, C. II, p.353.

(16) Valéry, *Poésie et pensée abstraite*, Œ.I, p.1339.

(17) Valéry, C. II, p.971.

(18) Valéry, *Note et digression*, Œ. I, p.1210.

(19) Valéry, *Poésie et pensée abstraite*, Œ. I, p.1320.

(20) ヴァレリーの *Le Cimetière marin* の中の有名な一節。

(21) 一方、神を感じるのには、心であって、理性ではないと言ったパスカルもまた、神の愛を感じ取る心情の次元へと飛躍するためには、意志の力を必要としたものと思われる。「精神は意志と一体になって進む (L.539)」もので有る限り、パスカルの心情もまた、意志や精神と決して無関係ではなかったはずであるから。

(22) Valéry, *Note et digression*, Œ. I, p.1210.

(23) Valéry, *Descartes*, Œ. I, p.807.

(24) Valéry, *Note et digression*, Œ. I, p.1209.

\* 引用文中の下線部は、原文においてはイタリックで書かれている。

(博士課程後期課程)